

# 「原爆(文学)研究」の視角／死角

——被爆の経験とどのように出会い、出会わないか——

畑中 佳恵

## I はじめに

『広島 記憶のポリテクス』(小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳、岩波書店、平成17・7 / Univ of California, Pr. 1999)で米山リサは、《多くの人間にとつて、なぜ広島過去の過去と現在を知る必要があるのかは、自明というにはほど遠いのだ》(56頁)と述べた。翻つてみるに、私たちが「原爆(文学)」を研究するほとんどの場合、その意義——何ゆえそれをする必要があるか、誰に向かい誰として語るのか——は「言うまでもないこと」として、思考せずにすませてきたのではないだろうか。

揚げ足とりを承知でいえば、『広島』の記憶と証言や、それらの語りが言及しているポストコロナルおよびポスト核の時代状況は、事実上、いかなる者にもこのグローバルな状況の外にとどまることを許さない(55頁)という米山自身の言葉にも、暗黙の前提がはたらいっているようにみえる。超越的な外部という位置性(客観的な観察者)の不可能を示すために言及された時代状況が、それ自体、自明の現状であるかのように語られていることのように。この点に議論の余地を残せば、「広島」と「私たち」の《分

かち難》い《連結》に《どのようにしたら気づくことができるだろう》(56頁)との問いを導出することも、その「気づき」に資するという研究・語りの意義付けも、一筋縄ではいなくなるだろう。

《ポストコロナルおよびポスト核》という大局的かつ一律的な時代・状況の分節を通じて説得力を得ることは、同時に、説得力の停止ともなる。いいかえれば右の問いは、それぞれの「私」が「広島」と本当に切り離せないかどうか、あるいは具体的にどのように切り離せないのか、という問いを遠ざけるような問いである。《加速化する死の不均衡配分の現実》を現す諸場面において、『先進自由主義諸国に生きる私たち』(x頁)が均質な「私」の集合であろうはずがない。どのような「私」がどのような「私たち」を構成し、または構成しないのか、という視点は、他でもない「私」のあり方を見定めるために欠かせないものである。

といつても、そのような「私」や「私たち」が『広島 記憶のポリテクス』に場を与えられていないと嘆くのは無い物ねだり、批判するのはお門違いというものだろう。それらは単に米山の問題機制から外れているにすぎず、いわば収穫が期待された畑ではないのだから。また、それは彼女自身のことだから常に正確に語れるはずだという思いこみは、素材にすぎない。「私」をめぐる「私」の語りは内部観測をけつして免れず、その意味で畑の収穫物としては不確定で不安定な何かなのだから。

確かなのは、「私」も「私たち」も「広島」も「原爆」も、何一つ自明でないということ。のみならず、それらをあらしめる互いの関係性はおそらく、生起と蓄積をつづけていること。そして、

その間で語られている言葉が、決して無力でないと信じられていること。——この「信」に賭けるといふ態度表明でもある批評的発言は、自身と現状の関係性・連結を追いかけつつ、その足場をたえず組み直さなければならぬだろう。ときに、特定の連結をめぐる語りが自己目的化していかないか（ただ語るために語るものとなっていないか）吟味しながら。またときに、既存の連結を出し抜いて、より効果的な別の連結を提示するチャンスをも狙いながら。

さて、返す刀で自分自身が斬られる番だ。いま、この私が、原爆という出来事をめぐる他人の経験や語りについて考え発言するとは、どういうことなのだろうか。私が想定する「私たち」は誰で、その臨界から透け見える「私たちの他者」に、どこまで思いを致すことができるか。本稿ではまず、「原爆（文学）」について語ることを身近にしてきた私自身のこれまでを、自己観察することから始めよう。

## II 北九州市民、日本国民、人類

「あの戦争」について饒舌になる八月恒例の新聞紙面。昨年の私がスクラップしたのは、北九州市の小中学校で行われてきた平和授業の衰退を伝える地味な記事だった。「8・9平和授業 衰退」（千代崎聖史、『毎日新聞』平成18・8・11）という見出しが伝えるとおり、北九州市は昭和五三年以降、広島原爆の八月六日だけでなく長崎原爆の八月九日に平和授業を行ってきた。が、平成一六年から実施校が次第に減少しているのだという。

記事によれば、北九州市の平和授業が九日に行われるようになったきっかけは昭和五二年にさかのぼる。《関係者によると、同市では77年、広島原爆の日の8月6日に平和授業をした一部教員が文書訓告処分となったことに批判が集まり、市教委は翌78年から8月9日を登校日として平和に関する指導をするよう校長会に要請。市立の全小中学校と高校、養護学校で平和授業が行われてきた》。

平成一五年の市学校管理規則改正により、登校日の設定が校長裁量となると、この慣習が揺らぎ始める。平成一四年時点で登校日の平和授業を実施した学校は、小学校・中学校ともに一〇〇%。台風接近で授業中止となった一五年をはさみ、一六年は小学校八〇%、中学校三三%へと落ち込んだ。翌一七年も減少傾向となり、昨年はさらに小学校六八%、中学校一七%へと減っている。なかでも、九日に登校日を設定した中学校は一校にとどまった。

市教委はこれについて、《年間を通して平和教育は行われている。8月9日に授業がないことは後退ではない》と説明したようだ。一方、《地域に即した平和教育があつてしかるべきで、北九州が9日にやる意義は大きい。（※中略）教委の責任放棄という印象を受ける》という日本原水爆被害者団体協議会・代表委員の発言が伝えられ、記事の末尾には、北九州市が原爆第一目標であったことが簡単に紹介された。

記事の着眼点はシンプルである。——あの戦争の記憶の風化。その際、通常の授業時間にどのような平和授業がなされているかは論点となるべきはずだが、それを素通りさせるほど「記憶の風化を懸念する姿勢」は常態化しており、「長崎原爆をめぐる北九

州市の責任」という言説は作用しつづけていることだろうか。

かくいう私は昭和五〇年代半ばに小学校へ入学し、高校を卒業するまで北九州市内で義務教育を受けた。当時、八月九日が登校日であり平和教育の日であることは当然と心得ていた記憶がある。私が受けた北九州市の平和授業の特徴は、「八月六日でなく九日」ということに加え、「長崎の原爆被災は我が小倉の身代わりだった」という因果関係をベースにしていたことだろう。

ここに『シミュレーション（モデル計測）「小倉に原爆が落ちた日』（朝日新聞西部本社社会部編、あらし書店、昭和58・8）という三〇頁ほどの小冊子がある。もしも当初の予定どおり小倉造兵廠に原爆が投下されていた場合、小倉・戸畑・八幡付近がどうなっていたかを予測したものだ。爆心地からの距離を同心円で記した地図を用いて、北九州は長崎より甚大な被害を受けたであろうことが説明され、そこを生活圏とする読者たちに被災を仮想させる絵本風のパートが続く——《小倉の中心部を焼きつくす火事あらしの光景を想像してごらんさい》（12頁）。啓蒙の意図は明らかである——《長崎の体験は、小倉の体験でもありません。『長崎原爆』は他人事ではありません》（29頁）。この本が教材として実際に使われたかどうかは不明だが、これを参考にした授業、これと同様の文法に則った授業が実践されていたのは確かだ。一人一枚ずつ配布されたプリントの同心円図のなかに、いま居る学校や自宅をさがす作業、そのときの追いつめられたような気分は忘れない。

このシミュレーションは朝日新聞社と森茂康教授（九州大学・物理学）の共同によるもので、昭和五七年八月五日付け『朝日新

聞』西部本社版のトップ記事にもなった（「原爆投下、小倉だったら… 爆心4キロ内ほぼ全滅」）。そこにも、昭和二〇年当時に報道されたものとは比べものにならないほど詳細な同心円図が掲載されており、それが市民の関心をひいたことは想像に難くない。「小倉は長崎のように、あるいはもっと悲惨になるはずだった（…：長崎市民に申し訳ない、北九州市民は責任を感じるべきだ）」という語りは、学校の平和授業に限定されたものでなく、日常生活で耳にして違和感のない程度には流通していたように思う。私にとつて原爆といえば長崎原爆であり、何よりもまず北九州市民として向き合うべきものだった。

もちろん、それだけではない。最初の出会いはテレビでだったか画集でだったかはつきりしないが、「原爆の図」（丸木位里・丸木俊子作、昭和25〜57）のいくつかの場面は、原爆を言い表そうとするとき真っ先に思い浮かぶものとなった。また、『まちんと』（松谷みよ子文、司修絵、偕成社、昭和53・2）や『おこりじょう』（山口勇子作、四国五郎絵、新日本出版社、昭和57・6）といった絵本も、子どもに原爆を伝えるメディアとして大きな力を持つていたはずである。これらを一括りにするのは乱暴かもしれないが、受容する若年者としては、どれも「日本の悲惨なお話」として身につまされるものだった。

日本国民として自国の過去に直面した感覚。それは、私自身が浸されていた「日本＝唯一の被爆国」という「常識」を作品鑑賞に持ち込んだために生じたのだろう。と同時に、右の作者たちもついていた「日本」単位の発想に誘われるところもあつたのだろう。例えば「原爆の図」の第一部「幽霊」（昭和25）は、番町皿

屋敷のおきくさんなど日本の女幽霊に重ねて描かれたといひ（丸木俊子による解説『原爆の囃』青木文庫、昭和27・4）、炎の描写などにも日本的といえる手法が取り入れられていた。また『まちんと』や『おこりじぞう』の作者たちがともに後書きで「民話」というキーワードを使ったことは、それらが民衆・国民の語りつぐべき物語であることを示唆しているようにみえる。

北九州市民として、日本国民として、そしてときに人類として——「原爆何個で全人類が減ぶ」という文句もまた耳慣れた感がある——、「原爆と関わる私」は主体化されてきた。この複合的な主体化によって、私は原爆について考え語ることを身近にしてきたのだと思う。そして、縁あつて原爆文学研究会に参加し、動機が稀薄なまま原爆や原爆文学をめぐる研究をスタートさせたとき、私にできた唯一のことは、原爆の身近さを疑ってみることだった。いいかえれば、自分の感じている身近さが言説をおして作られたものであることを確認し、それらの言説が自然化されていることを批判する作業だった。

例えば、小倉に原爆が落とされた場合の同心円図上に生徒の自宅を探させる、北九州市の平和授業の言説について。そこでは、生徒間に差異を生じさせようの考え方——昭和二〇年当時についてのシミュレーションなのであれば、自分たちの祖父父母の居場所を問う方が「より正確」である等——は排除されていた。この場合、正確さを求めることは倫理に反するとみなされるのである。「唯一の被爆国」という言説については多言を要すまい。広島・長崎の原爆被災には様々な国籍の人が巻き込まれたし、度重なる原爆実験は、実験する側も含めそこに居合わせた人々を被爆させた。

そして、「原水爆は人類を全滅させる」という言説には、ある種の転倒が認められる。実は、原水爆の登場によって人類というカテゴリーがより具体的に表象されるようになったのだから。実際に原水爆で死ぬかどうか（あるいはそういう想像にリアリティを持たされるかどうか）という問題は、あらゆる人（都市に住まない者、シエルターを持つ者、地球を脱出できる者……）に一律ではない。歴史的には、昭和三年の「ザ・ファミリー・オブ・マン（われら人間家族）」写真展に昭和天皇が訪れた際、展示中の被爆者の写真にカーテンがかけられたという事件も思い出される。その場から排除されたのは、被爆者なのか、昭和天皇なのか。——いずれにしても、誰もが人間家族の一員であるとは限らず、誰が一員となるかは政治的にも決定されるという例であるだろう。

このような、自分自身が浸されていた言説を分析・批判する作業は、原爆をめぐる言説と（気づいたときには既に）出会ってしまっていた私にとつて、原爆という過去の出来事、被爆という他人の経験と関わり合い直すための第一歩だった。

### Ⅲ 視角と死角、来た路と行く道

ある視角を得ることは、その外側に死角を抱え込むことでもある。自分が巻き込まれている言説を問題化するという方向性をとることには、次のような死角がつきまとうだろう。言説の指し示す「出来事としての原爆」とは何であつたか、被爆という他人の痛みをともなう経験と現在の私たちの「生の条件」はどのように連なっているか、そこにどのような責任関係が生じるか——を考

察すること。端的にいえば、原爆をめぐる自他の倫理的な出会いの回路を模索することを、関心の外に置いていたのである。

これは、スーザン・ソントグの言葉とも重なる。彼女は、遠隔の地で行われる戦争の映像とそれを見る者との関係性を分析するなかで、次のように述べた。

戦争や殺人の政治学にとりまかれている人々に同情するかわりに、彼らの苦しみが存在するその同じ地図の上にわれわれの特権が存在し、或る人々の富が他の人々の貧困を意味しているように、われわれの特権が彼らの苦しみに連関しているのかもしれない——われわれが想像したくないような仕方である——という洞察こそが課題であり……（『他者の苦痛へのま

なざし』北條文緒訳、みすず書房、平成15・7、102頁／Farrah Straus & Girou, 2003）

重要なのは、自分と他人が同じ地図の上に生きていると想像し、自分の生が他人の苦痛と無関係ではないという可能性に目を向ける、倫理的な態度である。私たちの多くにとつて、時間と空間を隔てた他人である広島・長崎の被爆者たちとの隔たりは、理解不能な他者との隔たりというべきものかもしれない。それでも、そのように表現することで理解のための回路を絶ち、地図を白紙のままうち捨てることになるなら、倫理的には無意味であろう。私たちは、被爆者という他者とその苦痛の経験に自身を関係づけるという困難な課題を抱えている。そして、原爆という出来事を力ツコに入れてする言説研究は、これを死角に追いやっているのである。

その一方で、今述べたような死角はさらに、別の死角を抱え込んでもいる。すなわち、「なぜ、他でもない原爆被災という過去との連関（だけ）が重要視されるのか」という前提をめぐる問いと考察、これが欠けているのである。とくに、自分自身はそれを直接経験していないと考える世代にとつて、自身の当事者性を見いだすことは自明のことではないはずだ。

これについては、いくつかの思考・回答パターンが考えられる。例えば、

① 理想的には、過去・現在のあらゆる苦痛の経験について自身の当事者性を見いだしていくべきである。ゆえに、まず手始めとして原爆被災を問題とするのである。

とするもの。これは回答として誠実らしくはあっても、十分とはいえない。なぜなら、私たちの物理的な限界を無視した理想状態を前提としているからだ。私たちは、与えられた時間と日常生活の全てを費やしても、他人の苦痛の経験に我が身を寄せようとする思索・行為を全うできないだろう。「手始めとして」という言葉に潜ませた優先順位そのものについて説明する必要がある。

加えて、あらゆる経験が表象され私たちに届けられるわけではない、という現実も踏まえておくべきだろう。とくに私の世代にとつて、自分の祖父母が経験した「あの日」「あの戦争」を経由することで誰かの被爆経験に接近しようとすることは、自分に可能な、他者への回路を開く可能性の一つではないかと思われる。

しかし、私の祖父母の「あの日」は表象されてこなかったし、これからも表象されることは（たぶん）ない。

私が最近よく想起するのは、母方の祖父が毎日欠かさず般若心

経の写経をしていた姿である。祖父が残していた膨大な半紙は一部だけ棺に収められ、大学生だった私もそれを手伝った。そのときは意味を結ばなかった光景が、「あの戦争」をキーワードにするのと読み解けるような気がしはじめたのは、やはり原爆（文学）の研究に関わるようになってからだったろうか。しかし、当時のことについて「内地で穴を掘っていた」としか話さなかった祖父について、周囲の知るところはあまりにも少ない。祖父が「あの戦争」の痕跡を残したかもしれないことに気づかされたこと自体、原爆という既存の言説・表象への関心に媒介されており、なおかつその痕跡は、祖父の「あの戦争」の表象が欠如していることを示す痕跡ではないのだ。

祖母はといえば健在で、八月八日の八幡空襲に巻き込まれた時のことをあの手この手で聞き出そうとする孫に、「黒崎から線路を頼りに歩いた。馬が真っ黒に焼け死んでいた。」という短い描写を繰り返して語ってくれる。しかし、それ以上のことは「わからん」。きつと、断片化された記憶のどれが話すに足るもので、どう繋いで話すべきか「分からない」ということなのだろう。「あの」東京大空襲、「あの」原爆被災、「あの」沖繩戦のように話せない……。祖母をはじめとする多くの人々の「あの日」は、表象されること・物語られることを期待されてこなかった。その結果、私には祖母の「八月八日」よりも長崎の「八月九日」の方が近しく感じられ、「八月九日」をいくつ経由したところでその前日にはたどり着けない。特定の出来事をめぐる既存の表象と言説だけが流通する事態は、《われわれが想像したくないような仕方》で連関するかもしれない。「その他もろもろの苦痛の経験」への回

路を狭めてもいるのである。

② 理想的には、過去・現在のあらゆる苦痛の経験について自身の当事者性を見いだしていくべきである。原爆被災はそのシンボルとなるがゆえに問題とするのである。

パターン①と前半部分は同じだが、「手始めに原爆被災を……」などと鈍臭く考えず、苦痛の経験の「象徴」として原爆被災に注目すればよいではないか、という回答も想定できる。これもまた、「他でもない原爆被災という過去との連関を重要視するのはなぜか」という問いの回答として十分ではない。「原爆⇨戦争⇨暴力⇨悪」というふうに一般化する思考は、日本国内で考えるほど自然なものとはいえない。現にアメリカ国民の多くが、原爆の使用によつて苦痛の経験は縮減されたと考えているという。原爆被災を痛みの象徴とみなす立場は普遍的なものでなく、説明なしに共有できると考えるのは傲慢であろう。（例えば韓国出身の友人にこれを説明する言葉を、私は持っているのだろうか……）

さらに看過できないのは、原爆被災にあらゆる戦争や暴力による苦痛を代表させようとするのが、原爆被災をめぐる具体的関係性——誰が、誰を、どのようにした結果、誰がどうなっているのか——を捨象するものであることだ。それは、「他でもない原爆被災」に当事者性を見いだそうとする方向性とは馴染まないはずである。

③ 被爆／被曝の経験は、誰もが現に当事者であるから問題とするのである。

この回答は最も有力なものとして想定できるが、やはり満足できるものではない。核兵器の拡散、「白国」「敵国」の核装備、劣

化ウラン弾による放射能汚染、原子力発電所の放射能漏洩と放射性廃棄物処理……は現在の話題である。被爆／被曝の可能性はたしかに日常化しており、かえって、それを危機的な問題とみなすこと（当事者であると感じること）から私たちを遠ざけているといえよう。

例えば、九州電力の新聞広告。そこには、母と娘が果物を食べながら会話している場面が素朴なタッチで表現されている。一年間に受ける放射線量は、原子力発電所周辺で〇、〇〇一ミリシーベルト以下。食べ物からは約〇、三ミリシーベルト。《放射能つて身の回りのいるんな所から出ているのね》《それにレントゲンなんかにも役立つっているんだよね》（ちよつと気になる、放射線のこと。『リビング福岡』平成17・11・26）——原子力発電所から恒常的に漏洩する放射能を、私たちの身の回りのありふれたものとみなすように語りかける公告である。それは、事故による漏洩の可能性や廃棄物からの放出については一切ふれず、原子力発電に対する世論を「ちよつとだけ気になる」程度に制御しようとする。「適度」に知っているがゆえに恐れたり拒絶したりしない従属的な主体、当事者もどきを生み出す言説といえるだろう。

これを一つのモードとして捉えるなら、私たちが具体的な当事者であるといえないこのモードのなかで、あえて当事者となるべきであるとしたら何故か、が問われなければならない。例えば、

「北朝鮮の核装備」を想定して思考・行動するのは誰なのか、原発事故で被爆／被曝するのは誰なのかと考えるとき、各々の生活圏の違いは重要な違いとなりうるはずだ。「均質な私たち」「一枚岩的な私たち」という立場からは、その経験（の可能性）を切実

な問題とみなすことは難しい。

なぜ私は、他でもない原爆被災という過去の他人の経験を自分にとつて重要だと考えるのか。私は物理的な限界をもつ存在だから、あらゆる痛みを経験の当事者となることはできない。かといって原爆を象徴化して関わることは、具体的な当事者となることから遠ざかる姿勢である。そしてまた、「ポスト核のこの時代、被爆／被曝に関しては誰もが現に当事者ではないか」という物言いは、私自身の当事者性を突きつめることを放棄する態度にもつながら、というのであれば……。死角そのものをめぐる私の思考は、現時点、このあたりで行き場を失う。その背後に広がるだろう死角には、毛ほども触れられずに。

いくつかの死角を視角に繰り入れたところで頓挫したいま、それでも「行く道」がすべて塞がっていると考えるのは早計だろう。私は、これまで述べてきた問題を不明瞭なまま携えて、一旦、原爆をめぐる既存の言説の分析という作業に立ち戻りたいと考える。といつても、ただ「来た路」に撤退するわけではない。とくに前の死角と関わり、死角の性質を明らかにするような視角を試みることで、「行く道」の模索となること——次の展開のための螺旋状の回帰となること——を期待して。

以降の章では、原爆および被爆をめぐる過去・現在の言説を、三つの視点で分析したい。IV章（長崎原爆、ある典型的表象（表象の不在）との格闘）ではまず、典型的な原爆・被爆表象が更新されようとする場面に焦点を合わせる。そこでは、表象行為と関わる「当事者」の有り様を観察することになる。V章（新たな典

型的表象の創出とその周辺』では、典型化を期する表象と対照的な、周縁化された表象・言説に注目する。それは、可視化されたのち死角となっていくものの一例として理解できるはずだ。VI章〈典型的表象との戯れ／典型的表象の配置換え〉では、典型的な表象を利用して原爆・被爆と関わりとうとする近年の試みを紹介する。それらが指し示す、「私たち」の彼方の他者について思い遣ることになるだろう。

#### IV 長崎原爆、ある典型的表象（表象の不在）との格闘

分析対象として最初に取りあげるのは、『地人』という戦後長崎の文学同人誌である。一七名の同人からなる長崎文学懇話会がこれを編集・発行し、一号から一四号（昭和30・31・32）まで継続した。創刊号巻頭（木野普見雄「地人言」）には『原爆被災による感覚の新飛躍』がうたわれ、『過去のカテゴリー』にとらわれないことの宣言がみえる。『過去のカテゴリー』とは、長崎の伝統的なイメージとしての『開港史とキリシタン史』のこと。それらばかり懐古する姿勢を退け、原爆被災という『現実』に尺度を合わせ『新たな表現を求めるといふ、明確な方針を掲げている』のである。

内容もそれに違わず、一号から原爆と関わる作品をよく掲載し（一号には隈治人の俳句二〇連作「原子野」、二号には高島荷龍子の俳句一〇連作「寒き秒針」、三号には三上正雄の詩「暴風雨は波堤をこえようとする」、山田かんの詩「この貌のプロメテ」など）、文学論というかたちで表明される同人の主張が議論となる場面も少なくな

い。約三年の短期間ではあったが、長崎原爆をめぐる言説を多く発信し、新たな表象を生み出すための積極的な発信が行われた雑誌であった。

とくに原爆特集の組まれた四号（昭和30・8）は、『地人』の面目躍如といえる。巻頭には、長崎と関わりある文化人を中心に回答を依頼した、原爆文学と文学運動についてのアンケート結果（回答を得られた二四名分）が掲載されている。アンケートの質問文は次のとおり。

#### 【質問】

一、広島にはかずかずの原爆文学が生れているのに、長崎では本格的な原爆文学は見られておりません。これは何に原因するのでしょうか。

二、一くちに原水爆反対、戦争反対といいますが、私たち文学運動にたずさわるものはいたい現実にとどういうことをすればよろしいのでしょうか。

質問一は、広島と比較して長崎には原爆文学と呼べる作品が欠如しているという認識に基づくものである。これに対して、作家の井上光晴や長崎の郷土史家・渡辺庫輔などが、永井隆の影響を指摘する回答を寄せた。『長崎の人々の気持が真正面から原爆の悲惨さにたちむかうかわりに、永井博士の一連の記録——所謂「口ザリオの鎖」の方向に眼をそらしてしまった』（井上光晴）。『永井博士が書いたようなものを文学だとおもう人の多いこと、そうした「文学」観は、原爆に対しても正しい観察を欠く』（渡辺庫輔）。

例えば永井隆の手記『長崎の鐘』（日比谷出版社、昭和24・1／



『日本の原爆記録 第2巻』日本図書センター)には、原子爆弾は「神の恵み」によつて浦上に運ばれたのであり、浦上のキリスト教信徒が清き犠牲として燃やされたおかげで戦争が終結した、との主張がみられる。当時の長崎に蔓延した、『原子爆弾は天罰、殺された者は悪者だった。生き残った者は神様から特別の御恵みを頂いたんだ』(93頁、復員してきた市太郎さんが聞いた言葉)という言説に対して、永井は、『信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教の血にまみれつつ信仰を守り通し、戦争中も永遠の平和に対する祈りを朝夕絶やさなかつたわが浦上教会こそ神の祭壇に献げられるべき唯一の潔き小羊ではなかつたでしょうか。この小羊の犠牲によつて今後更に戦禍を蒙る筈であつた幾千万の人々が救われたのであります』(95頁、原子爆弾合同葬弔辞の一部)という、キリシタン史を引用して浦上の被爆を意義づける言説を示した。いわば、「原爆被災Ⅱ天罰」という典型的な表象を反転させ、「原爆被災Ⅱ恩寵」という表象に取つて代わらせたわけである。この表象はまたたくまに普及し、典型的な表象の座を占めることになる。

『地人』は創刊当初から、開港史・キリシタン文化史という地方色一辺倒から脱却すべく、それらを拒否する姿勢を打ち出していた。が、さらにここで、原爆文学を阻む第一要因として永井の言説に照準して批判し、キリシタン文化史的な地方色を強く否定すべき対象とみなしていくことになる。同人の林田泰昌はアンケート結果を次のようにまとめた。『悲劇の哀傷に惑溺せず、原爆の惨禍を神の試練であり、払うべくして払つた犠牲であるところまかしてしまふ偽瞞、悲痛な体験をもつて自他に甘えようとすする卑

劣さ、悲劇を文学的に潤飾し美化し悲劇のヒーローあるいはヒロインとして自己を売ろうとする安易さ、そうした態度を払拭し、大きな歴史の一環として悲劇を科学的にみつめ、すんごうの偽瞞も許さない態度こそが、本格的原爆文学出現の第一の要件である』(「アンケートのまとめ 原爆文学を阻むもの」四号)。

林田は、この時期の同人の原爆(文学)観を最も牽引していた人物である。同じく四号掲載の詩論「原爆文学への期待」では、広島の詩人・峠三吉の『原爆詩集』を『悲しみと怒りの詩的定着』に成功している例としてあげながら、『民族の結合意識』を基盤に、『反原爆の』『抵抗性』『行動性』を峠作品以上に体现することが必要であると呼びかけている。要約すれば、——原爆被災による決定的な精神的变化があるはずなのに、長崎には過去のキリシタン文化に列なる永井の表象しか存在しない。広島を範とするなら、その状況は表象の不在ともいえる。長崎の文化人は、この典型的な表象すなわち表象の不在を乗り越え、日本人としての声を発しなければならぬ——との考えが示されていたわけである。

これは、創刊号巻頭言でいわれたような『原爆被災による感覚の新飛躍』、その精神的变化の内実が表象行為をとおして探られるのではなく、あるべき表象——永井的でないもの、日本人としての怒り——が前提され、その作品化が促されたことを意味しているだろう。『地人』四号には、同人たちがこの認識を共有していたことを示す作品が複数みられる。例えば、『神はそのとき小気味よく／もんどりうつて／地に墮ちたに違いない』という佐藤定幸の詩「あれから」の一節には、原爆Ⅱ神の恩恵とする永井の表象を反転させる意図が含まれているだろう。天の神が地を焼い

たのではない、地の争いが地を焼き天をも焼いたのだ……《地は天を焼きぬ炎天地を焼きぬ》(鳥巢末美「原爆忌」連作)という一句もやはり、永井的表象の反転である。また、広島を表象を意識した作句としては、『民族を巡る慟哭原爆忌』(絢小路義輝「罹災区」連作の一句)があり、五号掲載の「構成詩 長崎の海と山から」(風頭詩集団による台本)の紹介文は、作品の制作過程で、最後の部分に峠の詩を直接引用する案があったことに触れている。

『異人』誌上では、小説、絵画、映画についても同様の主張が展開された。太田洋子の「半人間」「人間襁褓」、丸木位里・俊子の「原爆の凶」、映画「原爆の子」「ひろしま」等を引き合いに、長崎には原爆に対する抵抗の表現のないことが嘆かれ(岡本芳輝「長崎における原爆文学と原爆映画」四号など)、同時に永井隆への批判も積み重ねられていったのである(柏崎三郎「茶番劇の系譜——永井隆の意味するもの——」五号、山田かん「長崎の原爆記録をめぐって——その方法を中心に——」一〇号など)。永井的表象と広島島の表象という対照的な二つの表象は、長崎において長らく参照される典型的表象となった。

しかし前者を単に反転させることも、後者を単になぞることも、新たな表象の誕生には結びつき難い。その意味で、林田らが重視した「民族/日本人」という主体は、長崎から発信する新たな表象の担い手として不十分であったはずである。その一方、ある学生たちによって発見され、表象の中心に据えられた「長崎の労働者」という主体は、峠の詩を参照しつつも、その直接的な引用を阻む表現を呼び寄せることになる。「構成詩 長崎の海と山から」(『異人』五号、昭和30・10)のことだ。以下引用。

構成詩「長崎の海と山から」は原爆十周年記念合唱祭の席上、二十数名の長崎出身学生と市内合唱サークルの協力で発表された。

この最初の原稿は、文学の勉強に本年はじめて上京した二人の学生によつて綴られた。首都の厳しい清新な空気が、若い彼等の心の眼をひらき、ふるさとへの愛と、長崎が人類と日本に対してもつ異常な責任に、引きしまるようなめざめを促がした。

この魂の高まりを構成詩として結晶させ、ふるさとに捧げべくひたいたいをつき合せた彼らが、新しく思いおこした長崎は、ザボン売りや石畳やオランダ坂の異国情緒の国際文化観光都市のふるさとではなかつた。むしろ、これらの雑音を払いのけながら彼らのまぶたに生き生きと映つた長崎は、昼、工場から一面にふき出ている力強い褐色の煙と、夜、漁船が船影を岸壁に横たえて明日を待っている、たくましい平和なふるさとの姿だつた。(※中略)

長崎学生のつどいに、構成詩上演が提案されると、早速約二十名が参加した。原稿はみんなで批判され、訂正され、練りなおされた。たとえば峠三吉氏(広島島の詩人)の詩を引用していた最後の部分は、長崎の経験や実情が語られ新しく書きなおされた。(※中略)

公演はテーマの未整理、芸術的形象の未成熟にも拘らず、約千名の聴衆を最後まで引きつけ、この新しいよびかけに激しい拍手が送られた。

風頭詩集団という名で発表された「構成詩 長崎の海と山から」は、大学生を中心に高校生や職場合唱団も加わって実現をみた、合唱朗読の台本である。右に引用した紹介文からは、永井の言説と親和性をもつ異国情調の表象を《雑音》として退け、峠の詩を参照しつつも《長崎の経験や実情》に見合う新たな表象を意識的に試みたことがわかる。典型化した表象・言説を乗り越えるために描出された長崎は、工場と漁場に代表される長崎であった。原爆は、長崎の海と山ばかりでなく、工場と漁場を破壊したものと捉えなおされる。

男全 昼――

稲佐山のふもとを見たまえ

煙突から

いや建物全体からふきでる

褐色の煙を

《造船所》と《製鋼所》

これこそ

長崎の原動力なのだ

(※中略)

女全 そして夜――

女D 浦上川の河口の岸壁に立つてみたまえ

(※中略)

無数の小さな漁船の群は

明日の力を蓄えている

男D だが、

眼を浦上に移すとき

わたしたちの傷は  
うずくのた

全 ああ、わたしたちは覚えている。

男C ふるさと長崎の

この山が

女D この海が

男B この土が

女C 火と灰と臭気におおわれ

男全 ふるさとの力

豊富な漁場は

女全 誇らしい工場は

全 破壊され

そして、峠の『原爆詩集』のよく知られる一節――ちちをかえせ／ははをかえせ／としよりをかえせ／こどもをかえせ／……／くずれぬへいわを／へいわをかえせ――をふまえて叫ぶ主体の位置には、長崎の労働者たちが召還された。ふるさと長崎が、その誇らしい工場で軍艦をつくり漁場は軍事演習場となっている「いま」、原水爆に抵抗する主体として中心となるべき人々が「当事者」として見いだされたのである。

男D (※前略)

土地をうばわれた農民が

製材所のおかみさんが

学校の先生が

山麓鉄道の労働者が

平和をかえせ

小鳥と花と太陽をかえせと

叫ぶ声。

(※後略)

この詩にも、原爆によつて肉親を失つた者として、被爆の様を切々と訴えるパートはみられる。しかし、新たな表象の模索という点では、長崎の労働者を当事者として前景化することで、「漁場と工場の長崎」の破壊と軍事化とを批判した場面にこそ成果があげられていた。この詩を編み上げた作者たちは、原水爆禁止の声をあげる当事者として、例えば学生としての自身を表明しようとはしない。「彼ら」の声を表象し共有する「私たち」、この「私たち」を構築することが、すなわち当事者となることなのだ。ここに観察できるのは、典型的表象を乗り越えるための格闘が、新たな当事者をめぐる表象（そして表象行為をとおして当事者となる者の主体化）と連動する光景といえよう。

## V 新たな典型的表象の創出とその周辺

風頭詩集団「構成詩 長崎の海と山から」は、典型的な表象を乗り越えようとする試みとして評価できる一方で、新たな典型となることを期する性質もそなえていた。その性質とは、「集団」としての表象行為であったこと、合唱という一体感を創出する仕掛けで「私たち」の声を発するものであったことを指す。さらに、当事者たる「私たち」に割り振られた台詞の主が、「男A」「女B」というふうに入れ替え可能な主体として想定されていたことは、誰もがほぼ等質の当事者となりうることを意味している。表象を

広く共有しようとする欲望は、表象を固定化しようとする欲望でもあるのだ。

V章では、この新たな典型を提供しようとする作品の周辺に、現代的な死角と関わる表象・言説が浮上する場面があつたことに着目する。以下、三点にしばつて整理したい。

### ① 被爆者像の複数性と関わる表象

一点目は、『地人』同人の山田かんによるものである。彼が発した詩「この貌のプロメテ」（三号、昭和30・6）、詩「夏之路」（四号、昭和30・8）、小説「囚人運動」（一四号、昭和33・2）にはそれぞれ、ひと口では語れない被爆者像が表現されている。最初に「この貌のプロメテ」全文を紹介しよう。

娘を見ない

あの娘はいつも 避けていく

牝鹿のように

敏捷にはない

私は避けない

私は避けていない

同い才の小学だつたから

私の意志より 素速く

にげているのは

原爆の貌

にWる私の貌だ

また あの障子に  
電気が灯る くらいセピア色の  
靴音が途絶え冬がきても  
そして 夏があつければなお  
電気は静止する  
疲れた心の像に

私は励んでいる  
私は疲れていない  
書物のまえに くつきり  
目覚めている  
きれいな娘よりも  
私はたれより 学ぶ  
大学ノートの述語は  
恋人もいらぬ 花もいらぬ  
音楽も なめらかなスカーフ  
コンパクトは  
まして役にたたなくなつた  
私のものではない コンプレックスよ  
それは私のか

この糸を断ちきつて！  
この結瘤をほどこいて！  
私の貌が溶け 冷却する と  
ケロイド

透明の糸は 肉芽を  
八方からある一点へむけて  
キリキリ結えつけてしまつた

別の私が生れていた

遠い日 ソロは女子の教室から流れた  
いい声をしていた

私は もう歌をしらぬ

この貌のプロメテに  
できるのは叫びの形の発声

糸が疼痛する――

なぜ みるのだろう

皆わすれたからだろうか

私はたくさんの 角膜のレンズに

曝されて

冷酷な被写体になる

この詩は、顔にケロイドのある娘《私》の煩悶を一段落高く、  
その娘のことを考える同窓生の男性の言葉を一段落低く配する構  
成となつている。まず娘の言葉に注目すると、娘にとつて自分の  
意志と自分の貌の間には距離ができてしまつてゐるのがわかる。  
自分の意志に先んじて反応するのが原爆という他者の貌なのか、

あるいは原爆の貌こそが自分の貌となつてしまつたのか、わからないという状態——《私の意志より 素速く／にげているのは／原爆の貌／にWる私の貌だ》(第二連)。

その娘を《見ない》(第一連) といいつつ観察している男性と、原爆のことを忘れてしまつたかのように娘を《みる》《皆》《皆》(最終連) が、この詩の登場人物である。これを読む者は、その何処まで(誰まで)が「被爆者」なのか不分明に感じるだろう。娘は、自身を全き被爆者とは考えない。ケロイドをもつ者としての生と、本来的なものであつたはずの生との分裂・葛藤を生きているのである。そして、《なぜ みるのだろう／皆わすれたからだろうか》と訝しがる彼女の言葉には、男を含めた《皆》も、ただ忘れていてるだけで実は被爆した者かもしれないという含みを読みとることができる。ケロイドがない被爆者、あるいはケロイドがあつてもアイデンティティが揺らがない被爆者(♂男)。被爆者の間にも、実は、見る／見られる関係において分水線がひかれ、不均衡な関係性が生じているのではないか、と考えさせる詩だ。

つぎに「夏路」で注目したいのは、被爆した人々が「山」から降りてきて、その属性が《物》として《ぼくらの内部に占めてくる》という表象である。後半の三連を引用しよう。

そして ある日ではない

九日——

無数の人が山から降りてきた

夕暮れても

こゆい夜の奥から

絶えまなく山を越えて現われた

ねちりん棒になつた肌や

一面 湯の花が咲いた背

千裂れた腕を支えた腕や

青いはみ出た内臓器

眼球なのであつた

音のない凄しい空の下

真昼の夏 路をあゆむと

それらの物が夥しくつづいてくる

遂に ぼくらの眼のなかえ

刃向つてくる

小指大 黄味おびた蠕動する

蛆のよう

耳孔 口辺 あらゆる間隙を縫つて

ぼくらの内部に占めてくる

山を越えて続々と降りてくる被爆者像は、この詩が書かれた當時も今も、よく目にする表象とはいえないだろう。すり鉢状の地形をもつ長崎・浦上の被爆跡は、平野の広がる広島的那样に「原子野」と呼ばれ、おそらくはそう呼ばれることで、道や田畑や河原を移動し、あるいは動けなくなる死傷者の表象を引き寄せてきた——《女C 道といわず／女D 晶といわず／女B 川といわず／女A 皮膚はただれ ガラスのかけらを 一面にかぶ

つてさまよつていた人たち」(前掲「長崎の海と山から」)。例えば永井隆が、被災直後の八月一日、《大切な学問のために、患者を助けるために》山腹の諸部落を訪れた(前掲『長崎の鐘』72頁)というように、実際は、高所で被爆したり被爆後に高所へと逃れたりした人々がいたことと思われる。が、そのような姿は今に至るまでほとんど表象されていない。

「夏路」のこの部分がリアルな描写かどうかはともかく、およそ典型的といえない表象であることは確かだろう。加えて、ここに「山人」のイメージに連なる「異人」の相が付与されているとみるのも、あながち無理とはいえない。というのも、山から降りてくる被爆者たちは「ぼくら」の眼に禍々しく映り、そして刃向かつてくる外部の存在であったのだから。詩の最終連では、その外部の「異なるもの」が「ぼくら」の内部から「ぼくら」を被爆させる。つまり「ぼくら」とは、その内部に外部を抱え込むことで被爆者となる者であり、抱え込んだ「被爆者(性)」に占領されつつ、その状況を語る者として多重化されている。ここにおいて「被爆者」は、安易に一括りにできない関係性をもって浮かび上がるのである。

小説「囚人運動」には、被爆から一〇年以上たった頃、家計を支えるために地味に働きつづけて自殺した妹と、家族をかえりみず平和運動に没頭する兄とが描かれている。妹・なつ江は生活のための労働に疲れ、その閉塞感から逃れるために死を選んだ。なつ江が亡くなったあと、母親は兄・章に向かつて、「おまえは逃げ場を求めて運動しているだけだ。家族のことを全く考えないで運動するのが平和なら、平和なぞない方がよっぽどましだ」と詰

め寄る。それは、生前の妹が兄について考えていたことでもあった。集団の論理——運動から一人欠ければ結束が弱まりどんどん欠けていってしまう、みんなで平和を唱えなければまた戦争になつてしまうという論理——に埋没し、その論理の「囚人」となることの欺瞞。そして、自身の生活を維持するだけの生活がやはり人を「囚人」にすることを、なつ江は死の直前に考えめぐらしていたのである。被爆した家族の軋轢を、出口の見当たらない二つの立場の緊張関係として表象したところに、この小説の眼目がある。

## ② どのような当事者となるべきかをめぐる逡巡

被爆／被曝の当事者性をめぐり、子どもの放射能雨への反応にとまどう父親を描いたのが、野地伸生の小説「黒い雨」(二四号、昭和33・2)である。ある日曜日、二年生と四年生の子どもが「放射能雨が降ってきた」と慌てて帰ってくる。「セシウム一三七、学校の先生が体に悪いと言っていた」と。

それを聞いた父親は《なにか得体の知れない不安》を感じる。「放射能雨を降らせる原水爆実験は止めさせねばならない」と習ったとおりに話す子どもの前で、父親は考え込んだ。

それは良い。しかし余りにも安易にそれを唇にし、余りにも安易にそれを怖がる。それが逆に恐怖の実体を安易に解釈してしまふ。そのことを懼れるのだ。(※中略)といつて原水爆が実際は、どれほどおそろしい、恐怖に充ちたものであるかを、教え込むことも、またためらわれる。それは現に実在し実験されているものだからだ。日常の雨にすら、本気でおびえるようになっては、たいへんだ。

黒い雨が降りやまぬなか、父は子にかける言葉に窮する――。

「放射能雨」という言説に浸されることで、父も子も既に潜在的な当事者となっている。しかし、言説をたんにオウム返しすることは、言説が指し示すものへの危機意識をかえつて薄めてしまうから、その当事者性は稀薄なものではない。それ以上の当事者、日常生活を変えてしまうような恐怖・痛みを自分のものとする当事者に、例えば子供はなるべきなのだろうか、という問いが提示されている。私たちがどのような当事者となるべきかは、一括で答えられる質のものではない。(それぞれの条件に応じてそれぞれに……答えることはたしてできるだろうか。)

### ③ 原爆と関わる文学活動の必要性にたいする留保

前に紹介した『地人』四号のアンケートでは、二番目に、《一くちに原水爆反対、戦争反対といいますが、私たち文学運動にたずさわるものはいたい現実にとどういうことをすればよろしいのでしょうか》という質問が掲げられていた。注目すべきは、この質問に対する井上光晴の回答である。

太宰治研究、源氏物語を勉強することでも充分(もちろんのことですが)戦争反対になりうるということを考えること。

この井上の発言は、「なぜ他でもない原爆被災を問題とするのか」の死角と関わることを求めるものだろう。原爆について語ることだけが原爆や戦争に抵抗する術であると思ひ込まないこと。そこから思考を始めることによってこそ、とくに後世の者があえて当事者となる可能性は開けるように思われる。

さて、①に紹介した山田かんの詩については、当時、周囲の理

解を得ることがなかったことを指摘しておきたい。『地人』五号の合評会の席上では《むつかしいと言うことが(※中略)問題となつた》という(はやし・上げた「わだつみの抒情によせる」六号、昭和31・1)。はやしは、《具体的な、誰でも理解できるような事柄でその内容と読者を結びつけてくれ》ないという大学一年生の読者の言葉を引いて、これを作者の問題点とした。このような反応が寄せられたこと自体に、『地人』及び読者という「集団」と、山田という「個人」との緊張関係が露わにされていただろう。山田が被爆の当事者としての表現を模索していたことを重視すれば、なおのこと、当事者は誰なのか、被爆者とは誰なのか、という問題がそこに抜きがたく横たわっていたように思われる。私たちがどのような当事者となるかに関わる②、なぜ他でもない原爆被災を問題とするのかに関わる③についても、とくに注目されたふしはみえない。③は、アンケート結果の総評においても黙殺された発言であった。

このような観点から、II章で述べた「死角」は早くから提出されていたが周縁化され、正面きつて問われないまま置き去りにされてきたものであるといえる。それは、古くて新しい問題なのだ。

## VI 典型的表象との戯れ／典型的表象の配置換え

最後に、典型的な表象との関わり方として、比較的最近の例を二つ取り上げたい。一つは、現代美術の作家で画家の会田誠によるマンガ『ミュータント花子』(ABC出版株式会社、平成11・8)。もう一つは、長崎の原爆と関わる小説を書き続けている作家・青



来有一の小説「石」（『文学界』平成17・7）である。

会田は『ミュータント花子』の「あとがき」で次のように述べている。

僕はこのほとんど自動的に連想されて出来上がった荒唐無稽な世界も、（平和ボケ代表として戦争を描く）という目的の『戦争画 RETURNS』シリーズに、是非とも組み込むべきだと思いました。そこには（戦争にすつかりアリエーを失っている）という世代的なりアリエーが、振れた形で深く刻印されているように思えたからです。

これを本稿の文脈に引き入れれば、戦争や原爆のごく典型的な表象（自動的に連想された要素によって構成される世界）と意図的に戯れることこそが、戦争を直接体験せず、当事者性も自然には得られない世代にできる、ある意味リアルな表現だということである。『ミュータント花子』は、会田が絵画の分野で展開してきた「戦争画 RETURNS」の一環として制作され、「終戦記念日」に刊行された。藁半紙にGペンもトーンも使わず描かれた、ラフな作品である。あらずじは以下のとおり。

あの戦争の末期、沖繩に住む心優しい美少女・花子は、「悪魔の国アメリカを倒せ」という天皇のお告げを夢に見る。沖繩に上陸したアメリカ軍兵士によって暴行された姉は自殺し、花子もロリコンのマッカーサー元帥によって性の奴隷にされてしまう。辛くもそこから逃れた花子であったが、エノラ・ゲイに乗りこんでしまい、原子爆弾とともに広島へ落下。放射能を浴びてミュータントとなった彼女は、長崎への原爆投下を阻止した。さらに、天皇の計らいで特攻隊員・純一と結ばれ、その超能力を十全にする

と、本土に上陸したアメリカ軍を竹槍で撃退。アメリカに降伏を迫る。百回にわたる原爆実験で巨大な怪物と化したルースベルト元大統領は、催眠術をもって花子を追いつめるが、彼女は純一や戦場に眠る英霊たちの力を借りて超巨大化する。そして、アメリカ大陸に跨り排便することでその全土を滅ぼした。戦いに傷ついた花子は、天皇に看取られつつ、世界平和を確信して息絶える。

——日本列島に菊の御紋がオーバラップする《美しい国・日本》というコマから始まり、ひめゆり部隊に所属するヒロイン、特攻隊員のヒーロー、眼鏡をかけた天皇、鬼のように角を生やしたアメリカ軍兵士、竹槍による撃退……「あの戦争」と関わる馴染み深い、誇張された表象がひしめいている。広島への原爆投下の場面も然り。アメリカが日本を性的に犯したという言説をふまえたコマ（キノコ雲が男性性器として描かれ、エノラ・ゲイのパイロットの《コイツで何度でもファックしてやる！》というセリフが配されている）、黒い雨、幽霊のような被爆者の姿といった典型的な表象によって構成されているのである。

一方、青来有一の小説「石」は、長崎の浦上川に転がっている石の記憶として、キリシタン禁制時代の殉教者たちの声、原爆で焼かれて水を求める被爆者たちの声、といったまさに典型的な表象を用いている。例えば次の箇所。

浦上川の川岸に大きな石が転がっているところがありま  
す。あれはただの石ではない。なんもかんもいやになった人  
が石になったとです。あのあたりには原爆で水を求めたり、  
火炙りにされた信徒がいつばいいいたので、きつといやになっ  
て石になってしまい、そのまま何十年も、何百年もあそこに

うづくまっておるのです。

語り手の《わし》は、幼馴染みで国会議員になった《九ちゃん》をホテルのロビーで待っている。自分の身の振り方を相談するためだが、《九ちゃん》はスキヤングルの渦中にあり、ロビーには記者会見が終わるのを待つ記者の姿もある。《わし》が女性記者と話しながら、自分を守るため石のように外部を遮断する術について思いをめぐらせるのが右の引用箇所である。また例えば、

水ばください。あーあ、からだが燃える。水を、誰か……、水をくださいー。

熱かあ、ひとおもいに殺してくれろー。おれは神さんのところに早う行きたかー。槍で突いてくろー。

わしは確かに男や女のいくつもの声を聴きました。

いつも、いつも、わしは胸でひとりでぶつぶつ言うております。でも、今のは、わしの呟きではありません。わしは泣き叫んではおりません。あれは石の声です。石が泣いておるのです。

《九ちゃん》から援助を拒まれた《わし》は、帰宅途中に浦上川のほとりを歩く。誰もいない夜の河原で彼が聞いたのが、それら石の声だった。

この小説の核心は、典型的な表象を読者に伝える媒介者（石の記憶を聴きとる男）を、一癖ある人物として造形したところにあるだろう。過去の出来事について書き伝えようとするならば、伝える者（情報の媒介者たる語り手）は読者にとって透明であるか、読者自身と距離のない信頼できる人間であるほうがよい。通常はそう考える。しかし、小説「石」ではおそらく、出来事の実ら

しさをカッコにいれ、その上で、過去の出来事にまつわる痛みのも何かを伝えることを試みているのである。

この石の記憶について語る《わし》は、知的障害をもつ中年の男性クリスチャンであり、ただし、その障害や宗教のみに規定される人物ではない。読者は彼の行動——会ったばかりの女性記者に真剣な恋心をいだき、彼女と結ばれ結婚したいと願い、その願いも幼馴染みへの嘆願も受け入れられなかったのち、公園のベンチに座り込んで神に《せつくすばさせてください》と祈る——に、ひどく感情移入できる側面と、突き放されるような側面の両面を感じるのだらう。《わし》と読者は互いに理解不能な他者でなく、共感を約束された間柄でもない。そして、この《わし》という人間はいつたい「誰」なのかということ抜きに、読者は彼の伝える記憶とその痛みに出会うことはできないのだ。そのような人物のなかに配置され直したことによって、典型的な表象としての原爆の記憶は、過去の出来事についての事実らしさを担うものからそのポジションをずらして、読者に届けられるのである。

この近年の二作品は一見かなり毛色が違うが、典型を通して原爆と関わる、その関わり方を模索する姿勢において通じるところがある。それは、集団的な記憶・典型的な表象をもってしか原爆の経験に出会えない、そのもどかしさを共有しているということだ。私たちは、さらに先の事態として、原爆・被爆の典型的な表象とすら出会わない「私たちの他者」を想定する必要があるのかもしれない。「私たち」が、気づいたときには既に原爆の表象と言説に浸されており、あたかも当事者であるかのように振る舞ってきた（振る舞うべきとされてきた）世代だとすれば、それ以降の

異なる世代を。そして、そのような他者たちに向けて語りかけようとするとき、前の「死角」をめぐる考察は避けられないものとして再々度浮上するに違いない。

【付記】本稿は第一七回原爆文学研究会（平成17・12・10、広島大学）における口頭発表「原爆を表象する典型をめぐって」をもとにまとめた。貴重なコメントをくださった方々に深く感謝する。